

は、労働市場分析の動態に＜方向づけ／
枠づけ＞された性格が強く、「社会的・
教育的トラッキング」の内実となる、仕
事に向かうエートスとハビトゥスがど
のように形成されどのように活用される
か、この点の分析が手薄になっているこ
とは否めない。なるほど、「労働市場構
造は、いわゆる＜予期的社会化＞機能を
持ち、人びとの地位達成に対する構えに
影響を及ぼす」との指摘はあるが、しか
しこの着眼が動態分析に生かされてい
ると思えない。この点に留意しないと、
経営者も労働者も＜方向づけ／枠づけ＞
られた選択を行う自動化した「機械人

間」に化してしまう。「社会構造は自己
の内部にその変動をうみ出す」のである
から、経営者特性なり労働者特性なりの
形成的「教育的トラッキング」過程の構
造の解明が欠かせないのではないだろう
か。そのことがコンフリクトを含む「構
造化する構造」を真に明らかにすること
のように思われるからである（加藤晴久
編『ピエール・ブルデュー』）。いずれに
せよ今後に期待できる優れた分析である
ことに異論はあるまい。

◆A 5 判 240頁, 2,884円

東京大学出版会

■ 書 評 ■

澤田昭夫・門脇厚司 編

『日本人の国際化―「地球市民」の条件を探る』

図書館情報大学 関 口 礼 子

地球は狭くなりつつある。コンパス、
火薬、印刷術の発明が、19世紀までに
「ナショナリズムの時代」を出現させ
た。今、コンピュータ、原子力、電子通
信技術（p. 67）のような巨大テクノロ
ジーの出現が、世界を変えようとしてい
る。「ナショナリズムの時代」から、新
たな「地球市民」の時代を創出させつつ
ある。

「国際化」をテーマにとる本書は、序
（澤田昭夫）と、20項目から成る「国際
化のための緊急提言」と、それらの基に
なる五つの章から成っている。

五つの章は、次の通りである。

1 章 日本における国際化思想とその系

譜（伊藤彰浩、喜多村和之、江淵一公）

2 章 知日外国人の見た日本の国際化
（澤田昭夫、澤田・マルガレーテ）

3 章 海外生活体験と国際的態度（岩内
亮一、門脇厚司、所澤保孝、他）

4 章 日本における国際化教育（小林哲
也、山村 慧、小島 勝、田中圭治郎、
奥川義尚、福田昇八、太田晴夫）

5 章 日本社会における外国人の受容と
教育課題（馬越 徹、村田翼夫、ジョ
ー・E・ヒックス、所澤保孝、大野
力）

本書の各章共通の基本的テーマは、
「国際化」とは何かということであるよ
うに読み取れる。一言で言えば、本書の

副題で示されたように、日本人が「日本人」から脱して、「地球市民」になることである。それを、何種類もの調査を通じて、日本社会を知る外国人、外国社会を経験した日本人、などの口を通して語らせ、時には、歴史的展開の説明、時には理論を交えて、明らかにしてゆく。

「国際化」とは、世界の人々、国々が互いにもちつもたれつ助け合い、風通しをよくする、一つの地球村の住民となるという「地球化」、グローバリゼーションの過程をさしている (p. 2), 「日本人と外人」文化から、さまざまな民族的相違にもかかわらず、根本的に「人みな (同じ) 人」 (p. 5) という文化に変わってゆく過程である, 「共通化・共同化」「相互依存関係の緊密化」の過程 (p. 65) である。開放性, 一般性, 普遍性をもつように自己変革を図る過程 (p. 72), 「差異の尊重」 (p. 67), 「人は皆ちがう」という単純な事実をはっきりわきまえることが, 日本人が国際化するための前提になる (p. 170)。社会生活の面では (外国人の) 日本人と「同等化」を推進し, 文化・価値観の面では「差異化」を認めていくことが, 日本社会を国際化していくことにつながる (p. 279)。「ヒト, モノ, 情報」の国際化があるが, そのうち, 「ヒト」の国際化が鍵になる (p. 337)。日本人の思考のなかには「国際人」と「日本人」の対立がある。しかし, 世界の中の日本という観点に立つ時, 「国際人」と「日本人」の対立を解消しなくてはならない (p. 206)。

国際化が招来するのは異質な文化が混

在し, 異なる文化を背景とする人間がぶつかり合う社会である (p. 245)。「教育の国際化」とは, 日本の教育を国際的通用度の高いものに変えていく方向性を持った教育運動 (改革) であり, 「方向性」の中心的概念は「異質なものと共存」にある (p. 292)。

大勢の執筆者が分担して, 日本の国際化の諸局面を, さまざまな方面から語っている。中国残留孤児の帰国定住問題は扱われていないにしても, あまり知られていないインドシナ難民の定住の問題, 書いた後の災いを危惧してとかく避けがちな在日韓国・朝鮮人・中国人の問題にも触れられている。そして, 大勢の執筆者の共同の作としては, 全体の執筆の姿勢や統一という面からも, まとまったものであろう。

「国際化」を阻んでいる日本の実情を語る中で, コミュニケーション能力の欠如が浮き彫りにされる。これは, 語学の不得手という面もあるが, 同時に, 「日本人ならわかるだろう」とか「外国人にはわからないでしょうけれども」と, 事柄を感覚的に捉え, 文化的に異なる人々にわかるように自分を説明する能力の欠如も挙げられる。そうした, コミュニケーションの能力の欠如が, 経済面では, 業務における権限と責任の所在の不明確さとも相まって, 外国人に「目に見えない障壁」と感じさせ, 「出島の人」的存在を意識させ, 経済面では摩擦を不必要に大きくしている。

日本人には, 人を, 個人として見ず, カテゴリーによって区分けして, カテゴリーで人を待遇する習性がある。その意